

女子高校生における学業的自己概念の内的な準拠枠 —教科の成績の個人内評価に着目して—

○宮本友弘 (東北大学)
鈴木悦子 (聖徳大学)

相良順子 (聖徳大学)

キーワード：学業的自己概念、内的な準拠枠、女子高校生

問 題

女子高校生の自己価値は学業的自己概念 (Academic Self-Concept, 以下, ASC) によって促進されること (相良他, 2015), また, 自己価値は抑うつ傾向を抑制すること (相良他, 2016) が示唆されている。以上から, ASC を高めることは, 女子高校生の心理的適応に有益であると考えられる。ASC は, 何を基準に評価するか, つまり, 準拠枠による影響が大きい。準拠枠には内的なものと外的なものがあるが, 前者はあまり検討されていない。本研究では内的な準拠枠として学業成績の個人内評価がどのように寄与するかを探索する。

方 法

調査対象 私立大学附属女子高校 201X 年度入学者 1 年次 173 名, 2 年次 170 名, 3 年次 167 名。

ASC の測定 質問紙法によって国語, 数学, 英語について「どのくらい得意か」を 5 件法で尋ねた。201X 年から 3 年間, 毎年 7 月に実施した。質問紙は担任を通じて配布, 回収された。

学業成績 調査協力校で毎年実施されている標準学力テストの国語, 数学, 英語の成績 (全国を基準とした偏差値) を使用した。

本研究は, 聖徳大学「ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した。

結 果

横断的個人内評価 各学年時で最も偏差値の高い教科に応じて 3 群を構成し, 各 ASC について分散分析を行った (Figure 1)。1 年時では, 3 つの ASC 全てで群要因の効果が有意であった。多重比較 (Bonferroni 法, $p < .05$) によれば, 各群と同じ教科の ASC が他の 2 群よりも有意に高かった。2 年時では, 国語と数学の ASC は 1 年時と同様であつ

たが, 英語の ASC については群要因の効果は有意であったものの, 各群間の差は有意でなかった。3 年時では, 国語の ASC は国語群と英語群が数学群より有意に高かった。数学の ASC は数学群が英語群よりも有意に高かった。英語の ASC は群要因の主効果は有意でなかった。

縦断的個人内評価 学業成績の縦断的变化として, 2 年生以上において各教科の当学年と前学年の偏差値の差を求めた。それらと各 ASC の相関を求めた結果, いずれも有意でなかった (Table 1)。

Table 1 各科目の学業成績の変化と ASC の相関

	2 年	3 年
国語	-.038	.118
数学	.095	.032
英語	-.072	-.033

考 察

国語と数学では, 他の教科と比べて成績が良いと, ASC が高まることが示唆された。ただし, 英語ではその傾向は 1 年時のみにみられた。一方, いずれの教科においても過去の成績からの変化は ASC には影響しないようであった。以上から, 国語と数学では, 他の教科と比較する内的な準拠枠で判断することが, 当該教科の ASC に強く影響すると考えられる。理系・文系の選択時の状況を想定してみれば, このような準拠枠の在り方は自然なように思われる。今後は, 生徒が実際にそのように判断しているかを検証することが課題である。

付 記

本研究は科研費 (26380949) の助成を受けた。

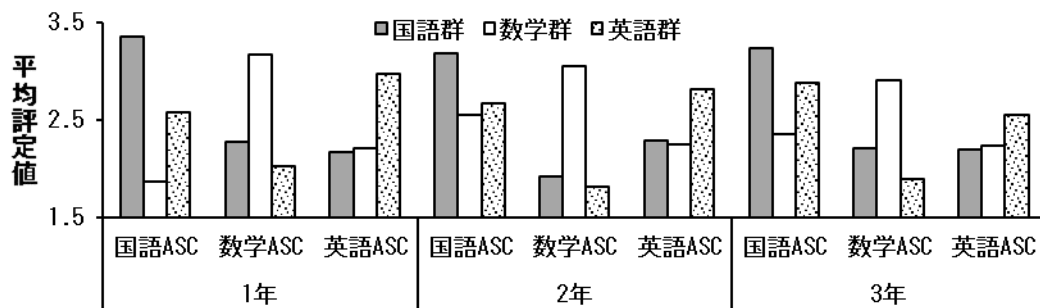


Figure 1 最も偏差値の高かった教科群別の各 ASC の平均評定値